

ニホンザルの所有行動に関する研究

稲葉あぐみ (神戸学院大・人文・人間行動)

本研究はニホンザル *Macaca fuscata* を調査対象に、食物分配がみられる以前の社会における所有の問題を、自他の認識や社会的コミュニケーションのメカニズムにかかわるものとして、さまざまな事例を用いてとらえ直してゆくことを目的とした。調査は嵐山群を対象とし、1996年5月～1997年11月にかけて断続的に計69日間おこなった。調査方法はおもにアドリブサンプリング法をもちい、食物、物、場所、社会的交渉の相手をめぐってみられた所有行動と考えられる事例を収集した。餌場における食物をめぐっては、一般に優位者は食物をもち、劣位者はもたないという傾向が認められるが、血縁者同士、特異的近接関係にある雌雄同士では順位に関係なく許容性の高い交渉が見られた。石や枝など遊びに使うものは、遊びが終わると同時に興味が失われ、状況依存的価値をもつと考えられた。メスにとっての食物や、オスにとっての配偶者などには攻撃行動が付随することがあるが、遊びに用いる物や母親という所有者がはっきりしている子守の対象としてのアカンボウ、そして優位者が所有している物などの場合は、もたない側に強い抑制が働いていて攻撃行動は現われなかった。さまざまな所有行動の共通点として、それらがもたぬ者の許容性によって支えられているということがあげられる。そしてそれは、順位とは無縁のものと考えられるのである。

白神山地におけるニホンザルの生息状況
揚妻直樹 (秋田経済法科大学・経済学部)

白神山地西部の秋田県八森町に生息する野生ニホンザルの生息状況の把握を試みた。八森町内の林道を巡回し、サルおよびサルの生息痕の発見につとめた。調査は1997年4月から1998年2月までの間に合計22日間行った。その結果、サルの集団を7回発見することができた。いずれの集団も10頭以下であり、観察者から50～300mほど離れていても、逃げるように移動する場合が多かった。降雪期には、雪上についた足跡の調査も行った。足跡の状態から、足跡がつけられた日、群れサイズを推定した。そして、この地域のサルは冬期に「直線距離で1日2km以上移動しない、2日間で4km以上移動しない」と仮定して、八森町に生息するサルの群れ数を推定した。その結果、この地域には10～20頭前後の群れが3～5群生息していることが推察された。ただし、この考察には不確定要素が多く含まれているので、情報量を増やしたり、他の調査方法を用いるなどして裏付けをとることが必要である。

秋田県下でサルによる実質的な農業被害が起きているのは八森町だけである。そこで、八森町におけるサルの農業被害の状況を調べた。八森町では1988年頃から農耕地付近でサルが発見されるようになった。そして、1991年より行政に対して農作物被害が報告されるようになり、1993年から有害駆除申請が出されるようになった。被害作物は大豆、稲、ネギ、トマト、キャベツなどである。被害額は1991年の160万円を最高に、その後は数十万円台を上下している。ただし、1997年はほとんど被害はなかったようである。野猿対策は町が中心となって徐々に進められている。